

最優秀賞

神奈川県教育長賞

兄が見せてくれた、幸せの形

伊勢原市立山王中学校

三年 小島杏奈

私の兄は知的障がいを持つています。「障がい者」と聞くと、多くの人は日常生活で常に介助が必要で、友達と遊んだり社会で活躍するのは難しいと想像するかもしれません。「かわいそう」「不幸」と感じる人もいるでしょう。私も幼いころ、兄の障がいを説明すると相手の表情が曇るのを何度も見ました。それだけ「障がい者＝不幸」という固定観念は根強いものだと思います。

けれど、兄はそのようなイメージとはまったく違う日々を送っています。陽気で優しく、冗談が好きで、人と話すのも大好きです。ごみ捨てに行く途中の道でも「おはよう！」

と笑顔で兄から声をかけ、返してくれる人がたくさんいます。職場に友達も多く、休日はいつもしょに食事や趣味の話で楽しい時間を過ごすこともあります。

兄は家を出て、グループホームで生活しています。グループホームとは、同じように障がいを持つ人たちが支援員の助けを受けながら共同生活をする場所です。そこでは朝起きて出勤し、兄は持ち前の明るさを活かし上手く会話をして働きます。昼休みは同僚と弁当を食べ、趣味の話で盛り上がります。休日に実家へ帰ると、家族と食事をしながら近況を楽しそうに話してくれます。

こうして書くと、ごく普通の日常のようですが、この「普通」を兄が手にしていることこそ大切だと私は感じます。障がいがあつても暗く孤独な人生とは限りません。兄は自分なりに人間関係を築き、社会の一員として生きてています。

ここに至るまでには、多くの人の努力と見守りがありました。学生時代は勉強や運動で苦労し、落ち込む日もありましたが、家族や友人、先生が兄の得意や好きなことを見つけ、伸ばす手助けをしてくれました。できることや楽しめることが増えると、それが自信となり、表情や行動にも前向きさがあふれるようになりました。

これまでのことから、人は得意や好きなことを活かせると私は学びました。障がいのある人には特に重要で、周囲が力を信じ、環境を整えるかどうかで人生の質は大きく変わります。安心して挑戦できる環境は、その人の未来を大きく変える力があります。兄の場合は、家族や地域、学校、職場が協力し、挑戦できる場をつくってくれました。そ

れらの見守りがあつたからこそ努力を続けられたのです。もし、最初から「できない」と決めつけられていたら、今のような生活はなかつたかもしれません。

今の日本には、障がいのある人がその人らしく力を発揮できる「輝ける場所」をもつと増やす必要があります。特別な施設や立派な舞台よりも、安心して参加でき、受け入れられる場所なら、それは立派な輝ける場所です。

兄の姿は、環境が人を変える力を持つていていることを教えてくれました。障がいがあつても不幸とは限りません。

どんな人でも自分らしく輝ける場所があることが大切だと考えます。障がいの有無や得意、不得意にかかわらず、その力や魅力を發揮できる場があれば、自信を持つて生きていけます。周囲の理解や支えがあれば、誰もが社会でかけがえない存在として輝けるのです。

兄のような知的障がいに限らず、発達障がいや精神障がいなど、見た目では分かりにくい障がいを抱えていて生きにくさを感じている人たちがいます。そうした人たちが、安心して自分らしく力を發揮できる「輝ける場所」が、もっと増えてほしいと願っています。誰もが自らしく生きられる社会こそ、本当の意味で豊かな社会だと思います。